海を越えた絆

沖縄県立首里高等学校三年 東江 咲季

“I hate Okinawan people. (私は沖縄県民が嫌い)”以前、あるアメリカ人に言われたその言葉が、今も心に残っている。「戦争が背景となり、沖縄県民はアメリカ人を嫌っている。だから、私もあなたたちが嫌い。」彼女は、そう理由を話してくれた。私は、初めての状況に驚いたのと同時に、悔しく悲しい気持ちにもなった。「皆がみな、そう思っているわけではないはずだ。」と確信をもてずも必死に伝えるしかなかった。

沖縄県南部にある「平和の礎」には、国籍や軍人・民間人の区別なく、沖縄戦で亡くなられたすべての人々の名前が刻まれている。そこは、沖縄で育った私が幾度となく、手を合わせ、平和を願ってきた場所でもある。しかし、昨年訪れた時のことは、私にとってこれからも忘れられない思い出となった。

私は、高校二年時、ペルーやボリビア、ハワイ、アメリカなどに住む海外移住者の子弟と、沖縄県の歴史や文化、自然を学ぶ交流事業に参加した。その一環として訪れた平和の礎で、海外参加者の先祖の名前を一緒に探すのを手伝った。名前のみが書かれた紙切れを手掛かりに、二十四万人を超える中から見つけていく作業は想像以上に大変だった。必死に探している時、ふと「沖縄戦で亡くなった人の遺骨を、その親族がさがしている」という話を思い出した。戦後から八十年が経った現在も、未収集の遺骨が多く眠っているのだ。平和の礎に刻まれた名前も、探されているという遺骨も、どちらも家族の元に還ってほしいという思いが私の胸を占めていた。

だからこそ、私が海外参加者の祖先の名前を発見できた時は、自分のことのように嬉しかった。彼に、「見つけた！」と声をかけると、「ありがとう」と礎に刻まれた名前を嬉しそうになぞっていた。そして、一緒に手を合わせた時、私は感慨深い気持ちに包まれた。異なる国籍や言語、文化背景をもつ彼と、同じ平和を祈るといふことは

決して当たり前ではないからこそ、強く胸に響いたのだと思う。私の中で、「平和」や「家族」という言葉の意味が大きく広がった瞬間だったと言える。

「海から豚がやってきた」という話はご存知だろうか。戦後、焦土と化し、食べ物も物資も不足していた沖縄に、ハワイに住むウチナンチュが募金を集め、五百五十頭の豚を海を越えて届けたという実話だ。戦火を逃れた移民たちが、故郷の人々の命を救おうと行動を起こした。

この出来事は、単なる「支援」ではない。そこにあるのは、「離れた地にいても、沖縄を想う心」だった。物が無い時代に届けられたのは、命をつなぐ「豚」だけでなく、人を思いやる「心」だったのだ。国境と言語の垣根を越えてつながったその行動は、まさに「結(ゆい)の精神、そして「ちむぐる(真心)」そのものであると感じた。

平和とは、ただ「戦争がない」状態ではない。互いに支え合い、思いやる心の中にこそ、真の平和は生まれる。そう確信したのは、この話に触れ、世界のウチナンチュと出会ったからだ。

「イチヤリバチョーデー(一度逢えば皆兄弟)。」この沖縄の方言に込められた思いこそが、「平和のメッセージ」だと私は思う。違いを越えて、互いを受け入れ、支え合う文化。それは、戦争では決して得られない、心と心のつながりだ。その絆こそが、争いを乗り越え、平和を築く鍵なのではないのだろうか。

そして、あのとき「沖縄県民が嫌い。」と言った彼女に、今ならこう伝えたい。私たちが憎んでいるのは、戦争という悲惨で残酷なものであり、国民そのものではない。時に、過去が生んだ悲しみが、誤解や偏見につながることもある。だからこそ、沖縄県には、歴史を乗り越えてきたからこそ育まれた深い優しさと温かさがあることを伝えたい。言葉や文化の違いを越えてつながろうとする心―それが、私たち沖縄県民の誇りだ。彼女にも、そんな沖縄の「島の温かさ」が届くことを心から願っている。

あの「海から豚がやってきた日」のように、思いやりと行動が世界を変える。私は、この島から平和の種をまいていける、そんな存在になりたい。